

日本計量生物学会ニュースレター第96号

2008年2月29日発行

目次

巻頭言「計量生物学コンソーシアム構想」
2008年度日本計量生物学会賞および功労賞候補の推薦のお願い
2008年度日本計量生物学会年会のご案内
日本計量生物学会2007-2008年対面理事会議事録
East Asia Regional Biometric Conference 2007 報告
計量生物セミナー報告
学会誌「計量生物学」への投稿のお願い
編集後記

巻頭言

「計量生物学コンソーシアム構想」

折笠秀樹 (富山大学大学院医学薬学研究部
バイオ統計学・臨床疫学)

15年位前であったらうか、巻頭言で大学教員の使命として、教育・研究の他に社会貢献が必要だと述べた。今や、現場で社会貢献の重要性が認知されてきたように思う。今回、何を巻頭言に書こうかといういろいろ考えたが、私が抱えている感想を二つまず述べることで切り出したい。

統計学を現実社会に応用するというとき、まず花開いた領域は何といっても品質管理ではないかと思う。米国ではデミング博士、日本では田口博士が有名である。現代はどうだろうか。特にわれわれ計量生物学に関係したところで、現実の社会問題として何があろうか。たとえば、BSE問題は食の安全に関係する重大問題であった。また、タミフルと異常行動、フィブリノーゲンとC型肝炎など、お薬の安全性に関係する問題もあった。ごく最近の話題では、新型インフルエンザへの対策といった問題もある。これらの社会問題はほとんど医師あるいは疫学者が関与してきたが、もう少しこのような危機管理の問題(安心・安全の社会問題と言ってもよい)に対して、バイオ統計学(Biostatisticsの訳として柳川先生の命名に従いバイオ統計学とした)が使命を果たす時代が来たかなというのが第一の感想である。

第二の感想は、この計量生物学における日本人の寄与が低いことである。昨年12月に東京で開催された国際会議で、丹後会長がデータを示した。国際計量生物学会の会員数は約五千人であり、日本人会員は約三百人なので6%を占めている。しかし、掲載された論文数は1%に過ぎない。雑誌「Statistics in Medicine」でも日本人のインパクトは1%である。自動車産業など日本がトップを走ってきた分野は数多い。また、中高生の数学の学力でも、日本は世界のトップを維持してきた。しかし、計量生物学での日本の地位はかなり低いといわざるを得ない。

危機管理という社会問題でバイオ統計学が活躍する舞台が広がっているのに、何しろバイオ統計学の底力が弱いというのが感想である。そこで思ったのがオールジャパンによるコンソーシアム構想である。別の分野に目を向けると、ゲノム科学は国家プロジェクトとして東大医科研や理研などを中心にオールジャパンでかなりの成果を挙げてきた。ごく最近では、万能細胞を用いた再生医療がやはりオールジャパンで始まったところである。各大学で細々として活動しても、世界にとっても太刀打ちできない。人数だけでみても、日本国内のバイオ統計学者全員合わせて米国の一流校一校分というのが現実である。そこで提案したいのが計量生物学コンソーシアム

構想である。日本国内のバイオ統計学の専門家が一つに集合するというものである。といっても、物理的に一箇所に集合するわけではなく、バーチャルとして一箇所に集まっているだけである。つまり、今までどおりに各施設で通常の仕事を。しかし、学会・財団などの団体が核となり、そこで危機管理などの社会問題を収集管理し、必要に応じてコンソーシアムの中でプロジェクトチームを形成し、問題に早急に立ち向かい研究するのである。ゲノムや再生医療のように、大学・研究所が核になってもよいだろう。科研費がそうではないかといわれるかもしれないが、バイオ統計学側の主体性がないし、緊急性にも欠けると思う。

計量生物学とは生物医学に関する現実の問題に対して、統計学的手法を用いて問題解決することが使命である。そのためには、生物医学に関する現実の問題に目をそらさず、もっと主体的に接近できる仕組みを考えるときかもしれない。

2008年度日本計量生物学会賞および功労賞候補の推薦のお願い

岩崎 学(学会賞担当理事)

日本計量生物学会は、日本計量生物学会賞、功労賞および奨励賞の3つの賞を授与しています。今回、これらのうちの日本計量生物学会賞および功労賞の推薦をお願いします。自薦、他薦を含め、会員の皆様に広く推薦をお願い致します。下記の様式により日本計量生物学会賞、功労賞ともに学会賞選定委員会宛てにお送りください。

奨励賞につきましては、日本計量生物学会誌、Biometrics誌、または Journal of Agricultural, Biological, and Environmental Statistics 誌に掲載された論文の著者で、原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員の中から選定委員会で選出いたします。候補者には選定委員会から受賞条件を満たすかどうか、確認させていただくことがありますので、ご協力をお願いします。

受賞者の発表と表彰式は5月の日本計量生物学会総会で行います。奨励賞の受賞者の方には9月開催の統計関連学会連合大会(慶応義塾大学)にて受賞講演をしていただく予定です。いずれの賞もニュースレターなどで各賞の受賞理由を公表いたします(推薦者名は非公開です)。

奨励賞の副賞は万有生命科学振興国際交流財団からご寄付いただいております。

<推薦の様式>

A4版1枚に、日本計量生物学会賞または功労賞推薦書と14ポイントで書き、本文10.5ポイントで以下の内容をご記入下さい。(資料の添付等は自由です。)

- 1) 被推薦者名、所属、連絡先(住所、電話、e-mail)
- 2) 推薦理由
- 3) 推薦期日
- 4) 推薦者(複数の場合は全員の氏名)
- 5) 推薦者(複数の場合は代表者)の所属および連絡先(住所、電話、e-mail)
- 6) 推薦締め切り期限(必着):平成20年3月31日
- 7) 推薦書送付先:

〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9 大和ビル2階

日本計量生物学会事務局 学会賞選定委員会 宛

会長:丹後俊郎,学会賞担当理事:岩崎 学

2008 年度日本計量生物学会年会のご案内 松井茂之・松浦正明・森川敏彦(企画担当理事)

2008 年度日本計量生物学会年会を下記の要領で開催します。一般講演を募集しますので奮ってご参加下さい。本年会は応用統計学会の後援で実施され、両学会員は本年会、6月6日のチュートリアル(計量生物学会、応用統計学会)、並びに6月7日開催の応用統計学会年会共に、会員価格で参加できます。本年会、並びに、チュートリアルの参加は、原則事前登録を予定しております。参加お申込には、申込用紙(会員の皆様へ既に郵送しております)、もしくは HP: (http://wwwsoc.nii.ac.jp/jbs/index_i.html) をご覧下さい。(年会・チュートリアルは一括申込をお願いします。参加申込締め切り:5月9日(金))。一般講演申込は下記 6. をご参照下さい。

1. 日時: 2008 年 6 月 4 日 13:00-18:00, 5 日 9:00-17:00
(時間は変更の可能性あり)

2. 会場: 筑波大学大会館
〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1
つくばセンターから筑波大学循環(右回り)バスを利用し(約7分)「大会館前」下車
(http://www.tsukuba.ac.jp/access/map_south.html)

3. 参加費:
正会員、応用統計学会員 年会・チュートリアルそれぞれ 3,000 円、非会員 5,000 円(事前申込 各 500 円引き、一括事前申込の場合、両方合わせて 1,000 円引き)、学生(会員、非会員共に)1,000 円。

4. 特別セッション:
「多重検定の新展開: False Discovery Rate とその周辺」
座長: 柴田義貞(長崎大学)

- (1) 問題提起: 柴田義貞
- (2) 理論的立場から: 松田真一(南山大学)
- (3) 応用の立場から 1: ゲノム解析における FDR:
牛嶋大(癌研究会)
- (4) 応用の立場から 2: ゲノム診断法の開発における FDR:
松井茂之(京都大学)
- (5) 応用の立場から 3: シグナル検出における FDR:
大森崇(京都大学)
- (6) 総合討論

近年、バイオインフォマティクス等の領域では、false discovery rate (FDR) という基準を用いた多重検定が大流行しています。本セッションでは、座長を長崎大・柴田義貞先生にお願いし、このような流行に対する問題提起をしていただきます。引き続き、南山大・松田真一先生から最近の理論的展開をまとめていただきます。各領域での応用の立場から、癌研究会・牛嶋大先生、京都大・松井茂之先生、同・大森崇先生が見解を提示し、議論に参加する予定です。FDR の理論と応用について整理する絶好の機会です。奮ってご参加下さい。

5. 特別講演:
演題: Recent development of Exact Statistical Inference for Binary Data
演者: Professor Seung-Ho Kang (Department of Statistics, Ewha Womans University, South Korea)
座長: 丹後俊郎(国立保健医療科学院)

6. 一般講演:
以下の分野毎に演題を募集します。
A. 臨床試験・臨床研究, B. 臨床診断学, C. 疫学,
D. ゲノム・バイオインフォマティクス, E. 農業・環境・資源,
F. その他

応募の際には、ご希望される分野名を必ずご指定下さい。分野毎の演題募集には、学会の独自性・特色をより打ち出し、専門性を深めるといふねらいがあります。分野毎に、より踏み込んだ活発な議論を期待しております。会員の皆様の積極的なご発表をお願い致します。

(1) 申し込み方法:
発表者氏名、所属(共同の場合は全員の氏名、所属)、講演題目、連絡先を明記の上、電子メール、ファックスあるいは葉書で下記にお送り下さい。また、Biometric Bulletin への掲載のためにお手数ですが、講演題目、発表者氏名、所属についての英語版も合わせてお送り下さい。

〒107-0062 東京都港区南青山 6-3-9 大和ビル 2F
(財)統計情報研究開発センター内
日本計量生物学会事務局
E-mail: biometrics@sinfonica.or.jp,
FAX: 03-5467-0482
HP: http://wwwsoc.nii.ac.jp/jbs/index_i.html

- (2) 申込締切(必着): 2008 年 3 月 28 日(金)
(3) 予稿原稿締切(必着): 2008 年 4 月 30 日(水)
ご講演を申し込まれた方には予稿原稿執筆要領をお送りします。

7. その他:
(1) 年会期間中に日本計量生物学会総会及び学会賞授与式、並びに評議員会を開催します。
(2) 年会後 6 月 6 日(金)午前「医薬品開発における統計学の活用: 用量反応情報と臨床試験の計画及び解析 ~ 第 1 相から第 3 相まで」(講師: 日本イーライリリー・上坂浩之氏)のテーマでチュートリアルセミナーを開催予定です。
(3) 6 月 7 日(土)には応用統計学会年会が同会場にて、また 6 日(金)午後には応用統計学会チュートリアル(テーマ: 「症例対照研究のデザインとその解析方法」 講師: 宮崎大・藤井良宣氏)が本年会と同会場(筑波大学)にて開催されます。

日本計量生物学会 2007-2008 年対面理事会 議事録

山岡和枝(庶務担当理事)

2007 年第 5 回対面理事会議事録

日時: 2007 年 12 月 11 日(火)18:00~19:30
会場: 東京大学医学部教育研究棟 13 階第 7 セミナー室
出席: 上坂、大橋、折笠、酒井、菅波、丹後、松井、松浦、松山、南、森川、山岡
欠席: 岩崎、大瀧、佐藤、浜田

議題:
1. EAR-BC 07 報告
EAR-BC 07 について、130 人の参加者を得て活発な議論が展開され、無事終了との概要報告があった。また、会計に関しても関係者の協力により黒字になったことが報告され、また監査を吉村監事に依頼することが承認された。会議報告は後日、WEB ページや会報等に掲載することになった。

2. 計量生物セミナー報告

EAR-BC 07 に引き続いて開催された計量生物セミナーについて、170 名ほどの参加者を得て盛会であったとの報告があった。セミナー報告は3ヶ月間ほどPDF化してJBSのWEBで公開することになった。

3. 2008 年度年次大会、チュートリアルセミナー

企画(年会)担当理事より2008年6月4日~6日に、2008年度年次大会、チュートリアルセミナーを筑波大学の大学会館にて開催し、特別セッションとして「多重検定の新展開: False Discovery Rate とその周辺」を、チュートリアルセミナーを6日午前中に「医薬品開発における統計学の活用: 用量反応情報と臨床試験の計画及び解析~第1相から第3相まで」(講師: 上坂浩之)を開催することなどが報告され、承認された。

4. 2008 年度統計関連学会連合大会企画委員会報告

2008 年度統計関連学会連合大会企画委員会について、連合大会の名称の変更などの注意点および、大会会場は慶應義塾大学理工学部(矢上キャンパス)で、2008年9月7(日)~10(水)に開催する予定であり、2月中には決定する予定との報告があった。

5. 編集委員会報告

編集担当理事より、計量生物学特別号「生物統計学の社会的貢献: 四半世紀の経験と今後の展望」を発行したこと、計量生物学 28 巻 2 号を12月半ば発行予定であること、5月のシンポジウムの特別セッション「環境・医療・医薬におけるリスク評価と管理」を次年度計量生物学 29 巻特別号として発行予定であること、現在の投稿状況等について報告があった。また、奨励賞選考委員を次回までに決定して報告することになった。

6. 会報に関する報告

会報担当理事より、ニュースレター95号を12/7に発送したこと、次号は2月末に発行予定であることが報告された。

7. 会員数等

庶務担当理事より、現在の会員数は469であり(11/29日時点)、前回に比べ増加しているとの報告があった。

8. IBC Committee Member の推薦について

IBC council member 佐藤理事から提案のあった IBC Committee Member の1つである Strategic Plan Committee への委員の推薦を行うこと、委員として上坂理事を推薦することが承認された。

9. IBC2012 開催への立候補について

IBC2012 への立候補について審議され、1) 日本支部として再度立候補すること、2) 開催場所は神戸とすることが承認された。佐藤理事には次回もしくは3月末までに原案を作成して頂くことになった。

10. 次回開催

次回の理事会は2008年1月29日(火)18:00~ 理科大九段校舎 6F 第一演習室にて開催することになった。

2008 年第 1 回対面理事会議事録

日時: 2008 年 1 月 29 日(火)18:00~19:30

会場: 東京理科大九段校舎 6F 第一演習室

出席: 岩崎, 大瀧, 折笠, 酒井, 菅波, 丹後, 浜田, 松山, 南, 山岡, 吉村(監事)

欠席: 上坂, 大橋, 佐藤, 松井, 松浦, 森川

議題:

1. EAR-BC 07 報告

EAR-BC 07 についてプログラム委員長報告が確認された。ポスター発表に関して発表する時間を設けてほしかったという意見があった。会計報告に関しては吉村監事より適切であったとの監査報告がなされた。なお、黒字分に関しては、学会会計に戻すことが承認された。

2. 学会賞選考委員について

学会賞担当理事より、選考委員を決定したとの報告があった。推薦締め切りは3月31日とし、推薦依頼を次号の会報に掲載し、WEB には早急に掲載し、できるだけ多くの推薦をしていただくようお願いしたいとの意向が申し添えられた。なお、監事から、学会の運営として学会賞をできるだけ定期的授与するようにとの申し入れがあった。

3. 日本計量生物学会倫理綱領WG報告

日本計量生物学会倫理綱領に関して、日本学術会議「科学者の行動規範」を遵守する倫理綱領案が WG から提案された。理事会として2週間を目処にコメント等があれば連絡し、その結果をとりまとめた上で評議員会にメール委員会として検討を依頼し、3月末の次回対面理事会で承認事項として提案することになった。

4. IBC 開催立候補について

IBC2012 立候補でのコンベンション 2 社の提案書の内容について討議がなされた。参加者数などの問題など推測が困難な面もあるが、参加者数を増やすよう理事会としても努力していくことなど共通の理解を得たが、予算の比較について吉村監事よりこれまでの経験を踏まえて比較のための提言が出された。それは、同じスペックで比較したほうがよく、特に人数とインターネット環境(無線ランの最大利用可能数など)や使用機器などについて再度検討し、さらにここ 2~3 年間の実績と実際に利用した関係者からの評判を確認したほうがよい、というものであるが、これらについて再度可能な範囲で検討し、その結果を e-mail 理事会にかけ、できるだけ早い時期に業者を決め、WG を作って作業を進めることになった。

5. 編集委員会報告

編集担当理事より、計量生物学 28 巻 2 号の出版と現在の投稿状況、および奨励賞の選考対象雑誌を選考委員で検討した結果として、計量生物学に深く関連した従来の 3 誌を本年度も対象とすることにしたとの報告がなされた。評価基準の制定に関しては次年度以降の検討事項にしたいと申し添えられた。

6. 会報について

会報担当理事より、会報第 96 号を2月末に発行予定で準備をすとの報告があった。

7. 会計報告

会計担当理事より、今年度の決算は、EAR-BC 07 の決算が承認されないと進められないため、決算報告は3月の対面理事会で行う予定であるとの報告があった。

8. 会員の入退会について

会員の入退会状況について報告があった。会員数が増えているが、その増減がわかるようにグラフ表示をという意見が出され、次回よりグラフ表示を取り入れることになった。

9. 理事会報告のパスワード、委任状取り扱いについて

以前の理事会で提案されていたメールの添付ファイルでの個人情報や会計などの重要事項の情報流出などの事故を防ぐため、理事会報告にパスワードをつける提案について討議された。原則として添付ファイルは PDF ファイルとし、それにパスワードをつけることが承認された。なお、パスワードは選挙後の理事会の発足時に理事会で取り決め、その任期中は同一のものを利用するものとした。さらに、委任状の取り扱いを明確にすると提案については、委任状の適用について吉村監事より補足説明も受けて、今後は依頼時に明記した文章を付記すること、メールでの委任状を受け付ける旨を明記しておくことが確認された。

10. 2008 年年次大会、チュートリアルについて

企画担当理事からの年次大会に関しての進行状況が報告された。会員の参加状況の早期把握と当日の事務負担を削減することをめざした参加費の事前振り込みを推奨するため、年次大会およびチュートリアル参加費とも事前申し込みでは 500 円割引で 2500 円、当日参加では 3000 円に変更したいとの企画担当理事からの提案について討議され、承認された。3 月発行予定の会報に案内を掲載するよう企画担当理事に準備を進めてもらうことになった。

特別講演に関して、会長より韓国計量生物学会の前庶務理事 Kang 氏の特別講演「Recent development of Exact Statistical Inference for Binary Data」(旅費は不要、謝金のみ)の提案があり、承認された。なお、他には特に提案はなかったが、今後、候補ができた場合には企画(年会)担当理事に連絡することとした。

各種委員会の日程として、4 日(水)夜に理事会、5 日(木)昼に評議員会、午後には総会(例年は昼食後すぐに総会(学会賞授与式)、夕方に総会)の開催をすることが確認された。

11. 次回理事会を 3 月 27 日(木) 17:30 ~ 19:00 に東京理科大学大九段校舎にて開催することになった。

East Asia Regional Biometric Conference 2007 報告

プログラム委員長 佐藤俊哉

2007 年 12 月 9 日(日)から 11 日(火)にかけて、East Asia Regional Biometric Conference 2007 (EAR-BC 07)を東京大学弥生講堂一条ホールにて開催しました。12 月 8 日(土)の海外招待者、国内組織委員会有志による夕食会からはじまり、盛会のうち終了することができましたので、関係各位のご協力に感謝するとともに、ここにご報告いたします。

総演題数は、

キーノートレクチャー	1 題
オープニングセレモニー	5 題
招待講演(3 セッション)	9 題
一般講演(5 セッション)	20 題
ポスターセッション	12 題

の計 47 題でした。うち海外からの演題はオープニングセレモニー 4 題、招待講演 3 題、一般講演 6 題、ポスター 1 題と、幸い国内外からバランスよく申し込みがありました。

会議は IBS 庶務理事 Ashwini Mathur 先生の司会によるオープニングセレモニーからはじまり、IBS 会長 Thomas Louis 先生による「Our Future as History」と題した IBS のあゆみとこれから果たすべき役割についての講演、韓国、インド、中国、

日本各支部のあゆみや現在の取り組みについて紹介がありました。

引き続き学術講演では招待、一般講演ともに活発な討論があり、2 日目には丹後会長による「Tests for Spatial Randomness: Detection of Disease Clustering and Outbreak Threat」と題したキーノートレクチャーで、Tango's Index をはじめとする疾病集積性に関するこれまでの研究についてまとめが報告されました。

コーヒーブレイクなども国内外の参加者同士、話がはずんでいました。インド、韓国、中国の会長、庶務理事の方々にもこの会議は好評で、今後 IBC の間の年に持ち回りで EAR-BC を開催することになりそうです。日本支部としては初めての試みでしたが、無事に終わることができてほっとしています。

最後に、会場での運営にご協力いただいた NPO 法人日本臨床研究支援ユニット 毛利さん、堀さんおよび学生アルバイトのみなさんに感謝いたします。



EAR-BC 07 参加報告：初日の感想

上原秀昭(株)ツムラ・国立保健医療科学院研究課程)

12 月 9 日朝 8 時半過ぎ、南北線出口からすぐのところにある東大農学部弥生キャンパスへ。門から 10 メートルばかり、銀杏を踏まずに落ち葉の上をゆく無理難題をしのぎつつ EAR-BC 07 の会場の一条ホール(木造の大講堂)に到着です。事前登録はされていたけれど名札は「無い」とのこと、受付で頂いた無地のタグに自ら記名しつつも書いた字の拙さに少なからず葛藤を覚え、オープニングセッション後に「荷物の山から発掘された」名札を頂きようやく歩き回れる気分になりました。

オープニングでは丹後会長の意外な趣向を楽しませていただきました。でも“alien”というのは、はて? . . . アジア各国から演者が来ていましたが、私は初日だけの参加なので全部は聞けないのが残念。

印象に残った発表を三つ。

[1] 中国の Fang 先生(O:02)、「伝統医学の評価と生物統計」みたいな直球のテーマで、かの国の統計家の事情などをまじえつつ話された内容がとても興味深かったです。伝統的理論が供する心身状態の概念を統計もしくは EBM の言葉に上手く整合させるのはどちらの側からしても challenging という話だったように思います。技術評価の観点からすれば伝統医学の効用も

伝統(レガシー)がもたらす行動面への影響

「純粋な」プラセボ効果

「純粋な」薬の効果

くらいに分けて考えられるべきでは、などと妄想にふけりつつ

聞いておりました。

[2] Sugino 氏らによる国際共同試験の現状に関するポスター発表(P:08)は、日本の現在位置と将来の方向性を切り取って見せてくれるようでした。製薬企業の「開発経験者」という人事枠にしても、「国内試験のみ経験者」と「国際共同試験経験あり」とで区別するようになるのでしょうか。

[3] Hirakawa 氏らによるマイクロアレイデータから遺伝子を特定する方法(C:06)は、比較的シンプルな工夫で検定統計量の分母を安定化しパフォーマンスを向上させることができたという内容だったと思います。いかにも日本人らしく、親近感を抱きました。

心残りなのは、インドから来て頂いた演者の発表を全く聴けなかったこと、餅つきのパフォーマンスを見損なったことです。あと、ポスターセッションの合間に Louis 先生(IBS 会長)に質問をしたところ「あなたの発音は聞き取れない」と言われてしまい、ショックでした。

今回は2年後にインドにて開催されることになったそうです。これからも、精進しないといけないようです。



計量生物セミナー報告

オーガナイザー 大橋靖雄・酒井弘憲

本年度の計量生物セミナーは、EAR-BC '07 に引き続き東京大学農学部弥生講堂にて開催された。

1. 国際共同試験にかかわる諸問題

13:30-14:00 イントロダクション

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻 大橋靖雄

14:00-14:30 データ標準化の観点から

日本製薬工業協会統計・DM 部会
三沢秀敏

2. アジアにおける国際共同試験の実際

14:30-15:00 アジアをリードする試験の在り方: 胃がんを中心として

静岡がんセンター 朴成和

15:00-15:30 中国試験・審査の実情

国家食品医薬品審査・評価管理局
(SFDA/China) Yao Chen

15:30-15:40 質疑応答

3. 国際共同試験ガイドスを巡る統計的諸問題

16:00-16:30 行政の立場から

医薬品医療機器総合機構審査役

宇山佳明

16:30-17:00 研究者の立場から

国立がんセンター薬事・安全管理室

柴田大朗

17:00-17:30 企業の立場から

ファイザー(株)統計コンサルティンググループ

小宮山靖

17:30-17:40 質疑応答

11 月に厚生当局から「国際共同試験について」というガイドランスが公表されたこともあり、フロアからも活発な質問・意見が相次ぎ、近年の計量生物セミナーにはなかった参加者の関心の高さが窺われる集会となった。

なお、初の試みとして、コスト節約のため紙ベースの配布資料をなくし、欠席会員への便宜のため本セミナーにおける発表資料は、すべて学会ホームページに掲載した。また著作権に配慮し、資料は二次利用しにくいように PDF 化し、掲示期間(2007 年 12 月 14 日~2008 年 3 月 31 日)を設け、不必要に拡散しないように務めた。

学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

松山 裕 (編集担当理事)

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の 5 種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていなくてもノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者(著者)名は掲載時には匿名も可とする。

5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。また、2004 年度から学会に 3 つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌, Biometrics, JABES に掲載された論文の著者(単著でなくても第 1 著者かそれに準ずる者)で原則として 40 歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年 1 名以上に与えられる賞」です。最近では、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くことと公募の際に引け目を感じるくらいです。会員諸氏の意欲的な論文投稿をお待ちしております。なお、投稿に際しては、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程を参照してください。

編集後記

今年最初のニュースレター(第96号)をお届けします。

昨年末から、EAR-BC、学会倫理綱領の作成、そして、今年の年次大会とシンポジウムの位置づけの変更など、会員間、海外との交流の充実や社会貢献を念頭においた新しい試みが盛りだくさんです。

大きなイベントの一つは6月の年次大会です。一般講演は、分野毎の演題募集となっておりますのでご注意ください(詳しくは本号-6を参照)。会員の皆様の積極的なご応募をおまちしております。

次号は梅雨明け頃発行の予定です。(松井)

<p>計量生物学会ニュースレター96号 2008年2月29日発行 発行者 日本計量生物学会 発行責任者 丹後俊郎 編集者 酒井弘憲, 松井茂之</p>
